バイエルンにおける英国女子修道会の存続

マクシミリアン１世とメアリー＝ウォードの関係を中心に

櫻　井　美　幸

はじめに
　第１章　英国女子修道会のミュンヘン定住
　　第１節　ローマからミュンヘンへ
　　第２節　パラダイザーハウス
　　第３節　バイエルン公マクシミリアン１世と枢機卿バルベリーニ
　第２章　アンガー女子修道院での苦境
　　第１節　教皇庁の廃止命令と異端の嫌疑
　　第２節　クララ修道院での拘束と解放
　　第３節　マクシミリアン夫妻とメアリー＝ウォード
　第３章　世俗の女学校として存続へ
　　第１節　災禍のミュンヘンと英国女子修道会
　　第２節　世俗の女学校としての認可
おわりに

はじめに

ジェンダー史の成果による従来の歴史像の読み替えにより、様々な時代・地域における女性の役割が可視化されつつある一方、ヨーロッパ近世において女性の宗教上果たした役割については歴史研究においてほとんど省みられてこなかった。しかし、宗教改革の影響の下、カトリックでは司牧活動における男女平等を志向する女性による能動的な宗教運動が存在したのである。主体は、17・18 世紀ヨーロッパ各地に誕生した「教育女子修道会」である。

その中でもとくに注目すべきは、「イエズス会女」と同時代人によって蔑称で呼ばれてきた女性たちの動きである。彼女たちはイエズス会に倣い、司教権力下に属さず、自由な宣教運動を求めた女性たちであった。イエズス会女団体の中で最も目覚ましい活躍を見せたのが、イエズス女会の元となった「列福マリア修道会」(IBMV)、別名「英国女子修道会」である[1]。この修道会は迫害によ

[1] 英国女子修道会の活動については、櫻井美幸「「イエズス会女」と呼ばれた女たち―対抗宗教改革期における女性の宗教運動」『女性史学』23 号、2013 年、1～12 頁参照。

り大陸に逃れたイングランド人の女性たちによって、故郷の再カトリック化を目標に設立された団体であった[2]。中心となったのはジェントリ出身で強力なリーダーシップと強固な信念を持ったメアリー＝ウォードである[3]。英国女子修道会は、開祖メアリー＝ウォードの存命中はイエズス会同様異教徒・離教者への宣教を活動の骨子に掲げ、修道女に課された禁域制を拒否した。彼女たちが開いた女学校の評判は良く、カトリックの女学校が不足している地域の聖俗多くの為政者たちから支持を集めた。ただしこの会に対しては支援者以上に敵も多く、メアリーは「宗教上果たす役割に男女の差はない」として、女性には禁じられている司牧活動への関与を堂々と主張し、正式な修道会としての認可を教皇庁から得ようとしたことでイエズス会以外の聖職者たちだけでなく、女性分派を禁止する当のイエズス会からも苛烈な非難を受けることとなる[4]。サントメール、リエージュ、ケルンからイタリア各地、さらにミュンヘンやウィーンと、カトリックの女学校を併設する英国女子修道会は短期間で急速にヨーロッパ各地に拡大したものの、その後 1633 年にローマ教皇ウルバヌス 8 世は英国女子修道会に異端の疑いで廃止命令を出し、メアリーたちは審問を受けるため拘束されることとなった。

メアリー＝ウォードは、数か月間ミュンヘンの女子修道院に拘束された後、教皇庁からの異端の疑いは正式に撤回されて自由の身になる。しかし英国女子修道会の宗教団体としての廃止命令は有効だったため、ヨーロッパ各地にあった英国女子修道会とその女学校は在地司教によりほぼ解散させられた。それにも関わらず、身分を世俗の女学校団体として、バイエルンのミュンヘンのみこの団体の存続が許されることになった。その後バイエルン地方を中心に女学校はいくつか開設され、1703 年の宗教団体としての認証に繋がっていく。

なぜ、バイエルンで英国女子修道会の存続は可能になったのだろうか。この時自領での世俗の学校団体として認可を認めたのはバイエルン公マクシミリアン 1 世である。彼は、三十年戦争中、カトリック「連盟」（リーガ）の中心的な諸侯として知られている。弟のフェルディナントが司教として統治するリエージュやケルンを含め、他の地域では英国女子修道会の支援を続けた所はない。しかし、マクシミリアンは英国女子修道会の財政的援助を続け、廃止命令が出た後も自領での存続を模索し実現させた。ある意味、常に教皇庁に忠実であったマクシミリアンのこの行動は異例と言って良いだろう。なぜ彼は英国女子修道会への支援を続けたのだろうか。本稿ではこの点に焦点を当て、Dirmeier が編纂した宣教省側の史料とメアリーの書簡を手掛かりとして考察を行っていくことにする[5]。女性がイエズス会に倣うという試みの限界と、教皇庁とメアリーの板挟みになっ

---

[2] 英国女子修道会とイエズス会との関係については、櫻井美幸「ギャロッピングガールズ—17 世紀前期における英国女子修道会とイエズス会との関係をめぐって—」（以下「ギャロッピングガールズ」と略記）高田京比子・田中俊之・轟広太郎・中村敦子・小林功編『中近世ヨーロッパ史のフロンティア』昭和堂、2021 年、441～463 頁参照。

[3] メアリー＝ウォードに関する代表的な文献は次の通り。I. Wetter, Maria Ward, *Gründerin des Institutes Beatae Mariae Virginis der Englischen Fräulein*, Regensburg, 1994; H. Peters, *Mary Ward:ihre Personlichkeit und ihr Institut*, Innsbruck, 1991.; M. Wright, *Mary Ward's Institute. The Struggle for Identity,* Sydney, 1997; M. Chambers, *Das Leben der Maria Ward*, 2Bde, Regensburg, 1888.

[4] 櫻井美幸、「ギャロッピングガールズ」、454～458 頁。

[5] U. Dirmeier(Hrsg.), *Mary Ward und Ihre Gründung, die Quellentexte bis 1645*. 4Bde, Münster, 2007（以下、Gründung と略記）.

たマクシミリアンの苦悩、それでも敢えて彼が英国女子修道会学校を存続させようとした理由を明らかにしていきたい。

第 1 章　英国女子修道会のミュンヘン定住

第 1 節　ローマからミュンヘンへ

バイエルン公マクシミリアン 1 世が英国女子修道会のことを知ったのは、1620 年頃だと思われる。マクシミリアンの弟のフェルディナントがリエージュ司教とケルン大司教を兼任しており、英国女子修道会学校のリエージュでの成功について聞き知っていたであろうからである[6]。マクシミリアンは先立つこと 1617 年にポリツァイ条令を規定しているが、そこでは男子と女子の学校教育を促進することが書かれている[7]。福音派の信仰がカトリックの牙城であるバイエルンにおいても徐々に浸食する中で、ミュンヘンではカトリック信仰に基づいた女学校が存在していなかった。カトリック信仰を教えることのできる女性教師が絶対的に不足していたのが原因である。リエージュの女学校の隆盛を聞き、英国女子修道会学校にマクシミリアンが大いに興味を引かれたことは想像できる。

しかし、リエージュの女学校は債務問題でイエズス会との間で訴訟問題を抱えていた。イタリア各地に開学した女学校もイエズス会に敵対する聖職者の恰好の標的となり、当のイエズス会も総長命令により、会員が英国女子修道会に関与することを禁じられていた。メアリーがミュンヘン行きを決めたのは、どうやらドイツ地域に学校を拡大するためでなく、リエージュ司教の兄であるマクシミリアンにリエージュの学校への援助を頼むためだったらしい[8]。マクシミリアンの当時の妻は、ロートリンゲンのエリザベートであった。エリザベートの姉トスカナ公妃クリスティーナが、1626 年 11 月、メアリーのために推薦状を書いてくれた[9]。推薦状を携えたメアリー一行がミュンヘンに着いたのは、1627 年 1 月 7 日のことであった。

マクシミリアンは若い頃イエズス会のコレージュで学び、聴罪司祭もイエズス会士が務めており、カトリック信仰に篤い君主として知られていた[10]。マクシミリアン夫妻とメアリーが会ったのは恐らく 1627 年の 4 月初め頃と思われる。この時、メアリーはマクシミリアンからミュンヘンの少女たちのための女学校を開くよう要請された。倹約家で知られるマクシミリアンは、4 月 21 日バイエルン公の金庫であるホーフカンマーに命じて、年間 2000 グルデンを英国女子修道会のために拠出した[11]。この額は 10 人を 1 年間扶養できる額であった。そして、英国女子修道会にワイン

---

6 G. Schwaiger, Maria Ward in München, in; *Münchener Theologische Zeitschrift*, 60, 2009, S. .123.

7 M. T. Winkler, *Maria Ward und das Institut der Englischen Fräulein in Bayern*（以下 *Englischen Fräulein in Bayern* と略記）, München, 1926, S. 14.

8 H. Peters, *Mary Ward:ihre Personlichkeit und ihr Institut*（以下 *Personlichkeit* と略記）, Innsbruck, 1991, S. 682.

9 Dirmeier, *Gründung*, Bd.2, S.160f.

10 マクシミリアン 1 世の生涯については、Dieter Albrecht, *Maximilian I, von Bayern 1573–1651*, Oldenburg/München, 1998 参照。マクシミリアンの政治的な位置と性格については、C. ヴェロニカ・ウェッジウッド、瀬原義生訳『ドイツ三十年戦争』刀水書房、2003 年、67～70 頁参照。

11 Dirmeier, *Gründung*, Bd.2, S.192f.

通りのヴィルプレヒト塔の近くにある、以前にはクリストフ＝パラダイザー所有下にあった住居の使用許可が与えられた。この建物を使用して、4 月末には少女たちのための女学校が開かれることとなる。パラダイザーハウスの責任者はメアリー＝ポインズ、学校長はウィニフレッド＝ベディングフィールドであった。

第 2 節　パラダイザーハウス

パラダイザーハウスは、「宗教的目的に使用するように」と、クリストフ＝パラダイザーによって 1621 年にヴィッテルスバッハ家に贈られた建物であった。すでに職人たちの住居になっていたが、マクシミリアンは本来の使用目的に戻したといえる[12]。

ここにメアリーはイングランドなどから 12 人の修道女たちを呼んで、修道院と女学校を開いた。便宜上、「修道女」という言葉を使用したが、教会法上正式に認められた修道女では勿論ない。サントメールやリエージュでは在地司教が「宗教団体」として認可していたが、教皇から認可を受けていた訳ではない。バイエルンにいたっては、「宗教団体」として認可するのはフライジング司教であったが、その認可すら受けていなかった。つまり、ミュンヘンのパラダイザーハウスは正式には修道院ではなかったし、女学校も修道会学校ではなかったのである。当時ある意味絶対君主として強力な政治権力を行使していたバイエルン公・マクシミリアン 1 世の少々強引な勧誘により、ミュンヘンの英国女子修道会学校は開かれた。初期はドイツ語を話せる有能な教師の不足に悩んだにも関わらず、女学校はすぐに市民の評判を呼んだ[13]。ただし、ミュンヘンでの活動が最初から順調であった訳ではない。初期の問題は大きくわけて 2 つあった。ミュンヘンのイエズス会との関係と、ドル派のウルスラ会との合同問題である。

この時のイエズス会総長は、ムツィオ＝ヴィテレスキであった。しかし拙稿で示した通り、ヴィテレスキと英国女子修道会の関係は非常に緊張に満ちていた。彼自身はメアリーと仲間たちの信仰心の篤さや生活態度については何度も高く評価している。しかし、各地のイエズス会士たちには、彼女たちに関わることを強く、何度も戒めている[14]。今回もヴィテレスキは、メアリーたちがミュンヘンに向かった際、イエズス会上ドイツ管区長であったヴァルター＝ムントブロートに対し、ローマから 2 月 6 日の書簡で彼女たちに関わらないようにと釘を刺している[15]。一週間後にヴィテレスキはメアリーに対しミュンヘンで温かく迎えられたことを喜ぶ書簡を送っているので[16]、彼は二つの顔を使い分けていたことが分かる。

さらにヴィテレスキは 3 月 13 日と 20 日、ムントブロートへの書簡で、英国修道会とは距離を取ること、彼女たちに終油の秘蹟を与えないことなどを強く念を押している[17]。ミュンヘンのイエ

---

[12] Peters, *Personlichkeit*, S. 674.

[13] Dirmeier, *Gründung*, Bd.2, S. 164f.　教師が足りないのでミュンヘンにメンバーを送るよう、メアリーがイタリアの会員に頼んでいる。

[14] 櫻井美幸「ギャロッピングガールズ」455～458 頁。

[15] Dirmeier, *Gründung*, Bd. 2, S. 166.

[16] Ebd., S. 168f.

[17] Ebd., S.177., S.178f.

ズス会士たちは、恐らく英国女子修道会のことはよく知らなかったと思われる。もしかしたらリエージュであったように彼女たちに好印象を持ち、積極的に関わろうとするイエズス会士も出てくるかもしれず、それはイエズス会の敵たちにとってイエズス会攻撃の恰好の理由になるので、ヴィテレスキにとっては避けねばならないことであった。

しかし、バイエルン公夫妻は英国女子修道会に手厚い処遇をしていたので、ミュンヘンのイエズス会士たちは難しい対応を迫られた。実際、公夫妻がイエズス会の聖ミヒャエル教会の隣にあったヴィッテルスバッハ家の礼拝堂使用の許可を英国女子修道会に与えたところ、ミュンヘンのイエズス会コレージュ長だったヨハン＝マンハルトがそれを拒否するという事態になった[18]。公夫妻の機嫌を損ねたくないムントブロートの要請を受け入れたヴィテレスキは、4 月 17 日のムントブロート宛ての書簡によりマンハルトのコレージュ長解任を命じている[19]。公妃の頼みを拒否したのは賢明ではない、というのが理由の一つであった。ミュンヘンのイエズス会と英国女子修道会の関係は、常に緊張に満ちていたと考えられる。

もう一つ、この時の英国女子修道会が抱えていた問題に、ウルスラ会との合同問題がある。ウルスラ会といっても、多数派のパリ会則をとるウルスラ会ではなく、ドル会則をとる、フランスとスイスの一部で認可されていたウルスラ会である。この修道会は、1606 年にブザンソンのアンヌ＝ド＝サントンジュが開いた、イエズス会により近い特徴を備える団体である[20]。当時バーゼル司教が居住していたプルントルートで修道院学校を開いていたが、バーゼル司教ヴィルヘルム＝リンク＝フォン＝バルデンシュタインと、上ドイツ管区のイエズス会、バイエルン公マクシミリアンなどが中心となって、思想的に近い英国女子修道会との合同の道を探りメアリーとドルのウルスラ会との仲介をしていた。最終的にメアリーが禁域制の一部導入や、在地司教に従うことなどを許容できなかったために合同問題は失敗することになるが[21]、しかしこの時点では英国女子修道会がローマ教皇庁に認められて生き残る道を、イエズス会もマクシミリアンも模索していたということになる。

第 3 節　バイエルン公マクシミリアン 1 世と枢機卿バルベリーニ

マクシミリアンが英国女子修道会を招き、多大な支援をしていることに、ローマ教皇庁も黙っているわけではなかった。1629 年 1 月から数か月間、枢機卿フランチェスコ＝バルベリーニとマクシミリアンの書簡が残されている。教皇庁の懸念に対し、マクシミリアンはどのように対応したのだろうか。

フランチェスコ＝バルベリーニは、当時の教皇ウルバヌス 8 世の甥である。ウルバヌス 8 世は本

---

18 Peters, *Personlichkeit*, S. 678.

19 Dirmeier, *Gründung*, Bd.2, S. 190.

20 櫻井美幸「「イエズス会女」と呼ばれた女たち」、3 頁。ドルのウルスラ会について詳しくは、B. Arens, *Anna von Xainctonge. Stifterin der Ursulinen von Dóle (1567–1621). Lebendbild einer Jugenderzieherin*, Freiburg im Breisgau, 1903 を参照。

21 この間の折衝については、Dirmeier, *Gründung*, Bd.2, S. 195ff., S. 166ff., 171f., 187f.,202ff., S. 215f., 218f., S. 246f., 参照。

名をマッフェオ＝バルベリーニと言い、フィレンツェの名家の出身であった。ウルバヌス8世は教皇就任後、極端な縁故主義を取ったことでも知られており、教皇就任後すぐ立て続けに親戚3人を枢機卿に登用した。フランチェスコ＝バルベリーニもその一人で、ウルバヌス8世の兄タデオの息子であった[22]。

1628年に枢機卿になったバルベリーニは英国女子修道会とイエズス会との関係について最初は詳しく知らなかったらしい。1628年6月7日付けのプラハ教皇特使カルロ＝カラーファからバルベリーニ宛ての書簡には、英国女子修道会が神聖ローマ皇帝の支援を受けてプラハやプラスチラヴァに勢力を拡大していることへの憂慮と、禁域制を拒否しているのに正式に修道女になろうとしていることへの危険性が述べられている[23]。その後11月4日、教皇特使としてウィーンにいたジョバンニ＝バティスタ＝パロット枢機卿もメアリー＝ウォードを名指しして、皇帝やバイエルン公などが高く評価していることを憂いている[24]。当時教皇庁の高位聖職者の多くがイエズス会に反感を持っていたが、そのことも英国女子修道会の敵視に繋がっていた。

バルベリーニは1729年1月6日、バイエルン公マクシミリアンに当てて書簡を送る。内容は次のようである。数年前「イエズス会女とされる女性たちの団体」が設立されたが、この団体は教皇庁の承認を受けていない。もしかしたら閣下はこのように承認を受けていない女性たちを支援しているのではないか、しかし、閣下は教会法に反することをしようとはしないだろう、と。いささか脅しにも近い内容になっている[25]。

マクシミリアンは1月25日、バルベリーニに次のように答えた。英国女子修道会は推薦状の内容が良かったので受け入れたこと、そしてこの会の教皇承認については教会法上の問題であるので自分は介入できないことを述べた後、ドイツでは若い女性たちへの信仰教育が急務とされているので、彼女たちは必要な存在であることを強調した[26]。

その後2月17日に再びバルベリーニはマクシミリアンに書簡を出している。その中で枢機卿は、公が見張っているのでバイエルンでは彼女たちは認められているのだろう、しかし教皇庁は誓約もせず、禁域制も守らない女性たちを禁止しているのだ、と再度警告を与えた[27]。それに対し，マクシミリアンは3月8日に短いながらも明確に返答を行った。自分は英国女子修道会への好意的な判断を維持するつもりであること、そしてイエズス会に厳しく敵対しているリチャード＝スミスが司教をしている今のイングランドにおけるカトリックたちの状況を理解してくれるよう求めている[28]。

英国女子修道会への攻撃は、会の女学校が東へと拡大していく中で益々激しくなっていったことが分かる。そのような中、マクシミリアンは教皇庁には英国女子修道会が教会法に反した団体であ

---

22 Ebd., S.319., Peters, *Personlichkeit*., S.704f.

23 Dirmeier, *Gründung*, Bd.2, S. 319ff.

24 Ebd., S. 388ff.

25 Ebd., S. 408f.

26 Ebd., S. 415f.

27 Ebd., S. 419f.

28 Ebd., S. 424.

ることへの判断を避け、自領での強固なカトリック信仰に基づいた女学校の普及のため英国女子修道会への支援を継続することを表明した。しかし、教皇庁における英国女子修道会の立場は悪化し、メアリーたちは苦境に陥ることとなる。英国女子修道会の廃止命令が教皇庁から発せられ、メアリーに異端審問への危機が迫ることとなった。

第 2 章　アンガー女子修道院での苦境

第 1 節　教皇庁の廃止命令と異端の嫌疑

1631 年 1 月 13 日、敵対勢力の要請に応える形でウルバヌス 8 世は英国女子修道会を異端の嫌疑により廃止する旨を示した教皇勅令を発した[29]。リエージュなどではすぐさま教皇特使が動いたが、ミュンヘンでは教皇特使がいなかったため、ローマの枢機卿アントニオ＝バルベリーニが、バイエルン公の聖職諮問委員会の長で聖マリア教会主席司祭であったヤーコボ＝ゴラに、先立つこと 1630 年 12 月 14 日付けの書簡でメアリー＝ウォードの拘束を要請していた[30]。

この時の様子は、パラダイザーハウスにいたエリザベス＝コットンの会員たちへの書簡に詳しく書かれている[31]。2 月 7 日、16 時頃ゴラは 2 人の聖職者とパラダイザーハウスに現れ、メアリー＝ウォードの前で教皇庁からの手紙を読み上げ、異端・シスマ・教会への反乱の容疑で彼女を逮捕し、身柄を拘束する旨を伝えた。メアリーがこのことを事前に知っていたかは不明だが、少なくとも抵抗することはしなかった。ゴラとメアリーはイタリア語で 2 時間程話をした。メアリーは、自分の団体は禁域制がないからといって一度も教皇庁から禁止されたことはなく、教皇も私たちの生活様式を褒めていたのに、と言い、自分たちの会は廃止されるのかどうかと聞いた。それに対しゴラは、それについては分からない、と答えている。実は 14 日前に拘束命令は出ていたのだが、彼はなかなか実行できないでいたのである。しかし、ミュンヘンのアンガー地区にあるクララ女子修道院という良い拘束場所が見つかったので、身柄を拘束することにしたと言った。アンガーのクララ修道院は、13 世紀後半に造られたミュンヘンでは古い修道院であった。すでにパラダイザーハウスの前には馬車が待っており、メアリーは会員たちに別れの挨拶もできぬままにパラダイザーハウスを後にした。アン＝ターナーのみ、メアリーの身の回りの世話をするために同行が許された。

一連のメアリーの逮捕命令と拘束に対し、マクシミリアンは何もできなかった。教皇から、メアリーの拘束には「世俗の腕」による支持が必要な旨が書かれた勅書を受け取っていたからである。マクシミリアン夫妻が異端の嫌疑による会の解散命令とメアリーたちの捕縛について何を思っていたか示す文書はない。ただ、少なくともマクシミリアンが直接彼女を助けようとはしなかったし、できなかった。メアリーは今まで大変好意的であった公夫妻の仕打ちに、落胆し嘆くこととなる。この点については、第 3 節で述べる。

---

[29] 教皇勅令の原文について、ラテン語では Ebd., S. 121ff. 詳しいドイツ語の解説は、Peters, *Personlichkeit*, S.855ff. 参照。

[30] Dirmeier, *Gründung*, 3., S. 115f.

[31] Ebd., S. 141ff.

第 2 節　クララ修道院での拘束と解放

アンガーにあったクララ修道院での日々は、メアリーや会員たちにとって辛いものとなった。メアリーは、捕縛の前から結石による痛みと慢性的な頭痛に襲われており、ほぼベッドで寝たきりの状態だった。クララ修道院に移されてからは異端審問の召喚を待つ日々であったが、心労もあり一時的には終油の秘蹟を受けるまでに体調は悪化した[32]。

メアリーは会員に何も伝えられずに移動させられたため、パラダイザーハウスに残された 30 人ほどの会員たちの不安も強かったと推測される。修道院に拘束された間は、見張りのついた 2 階の小さな部屋に閉じ込められており、週に何回かのわずかな差し入れを除き外部との接触は手紙のやり取りも含め禁じられていた。しかし、この間のメアリーが会員たちへ宛てた 23 通の書簡が存在する[33]。これは、会員たちが付き添いのアン＝ターナーに渡した差し入れにレモンが入っており、メアリーはこのレモンの汁を用いて会員たちに宛てて短い手紙を書いていたのだ。通常字が見えないのでただの白紙をアン＝ターナーは会員に渡したのだが、火の近くに置くとあぶり出しの要領で字が読めるというわけである。

クララ修道院の修道女たちは、最初メアリーに対して警戒していたようであるが、次第に態度を軟化させ、メアリーは彼女たちの親切に感謝すらしている。数週間、ローマからは何の音沙汰もなく、メアリーは病気を悪化させる。マクシミリアンの妃エリザベートはメアリーに医者を送っているが、なかなか体調は回復しなかった[34]。

この時期のメアリーの悲痛な心情が残っている[35]。私はローマに対して大それたことも、不必要なことも何もしておりません。…敬虔なカトリックとしての真の義務を果たし、ローマの従順な娘である以外何もしておりません、と。リエージュやケルン、トリアーの英国女子修道会も廃止命令を受けていたため、メアリーはミュンヘンでも公夫妻の個人的寄付で成り立っていたパラダイザーハウスから会員たちが追い出されるのではないか、と心配していた。メアリーの病気はますます悪化し、3 月 28 日には特別に聖体拝領を受け、4 月 1 日には終油の秘蹟を受けている[36]。

しかし、この後メアリーは少しずつ回復していったようである。そして結局ローマの宣教省は審問のための確たる異端の証拠を揃えられなかったのであろう、メアリーは解放されることとなり、4 月 14 日にクララ修道院を去ることとなった。メアリ―の解放がローマで公になったのは 5 月 10 日であるが、彼女に解放命令が伝えられたのは 4 月 12 日（棕櫚の月曜日）の前あたりではないか、と Peters は推測している[37]。

メアリー＝ウォードはしばらくパラダイザーハウスで体を休め、その年の 12 月に会の廃止命令を教皇庁から撤回してもらうべくローマに旅立つ。メアリーや仲間たちへの異端の嫌疑ははらされたが、宗教団体としての会の廃止命令は有効だったからである。全部でヨーロッパ各地の 10 の施

32　Schwaiger, *Maria Ward in München*, S. 125f.

33　1631 年 2 月 13 日から 4 月初旬まで。Dirmeier, *Gründung*, 3., S. 149–217.

34　トーマス＝ティアマイアーは、3 代のバイエルン公の侍医を務めた高名な医師であった。Ebd., S.167.

35　3 月 27 日付け。恐らく教皇に送る筈だった弁明であろう。Ebd., S. 204f.

36　Ebd., S.216f.

37　Peters., *Personlichkeit*, S. 881.

設が廃止され、会員の 200 人以上が会を離れることとなるが、結局教皇庁による会の廃止命令は撤回されることはなかった。その後、メアリーはローマから故郷のイングランドに戻り 1645 年に亡くなる。ミュンヘンには二度と戻ることはなかった。

第 3 節　マクシミリアン夫妻とメアリー＝ウォード

それでは、この教皇庁からの英国女子修道会の廃止命令と、異端の疑いによるメアリー＝ウォードの身柄の捕縛という苦境に対して、バイエルン公マクシミリアンは彼女と会の活動を助けるためにいかなる対応をしたのだろうか。

端的に書くと、何もしなかった。というより出来なかったのである。前述したように、マクシミリアンはカトリック諸侯の筆頭として三十年戦争を戦っている最中であった。しかも、教皇庁や枢機卿からは英国女子修道会の支援をやめるよう脅しに近い書簡を受け取っていた。彼が教皇庁の命令に反する行為を行える筈もなかった。しかし、メアリーは彼の政治的立場を理解することができなかった。クララ修道院に拘束された時、彼女は公夫妻が解放に向けて教皇庁に対し何らかの行動をしてくれると期待していたのだろう。レモン汁の書簡には、公夫妻に対する失望が赤裸々に書かれている。

2 月 13 日の会員のエリザベス＝コットン宛ての手紙には、次のようにある[38]。「マクシミリアン夫妻は私が死ぬかもしれないということを恐れているのではありません。私が、彼らの領地を去る前に私が死ぬことを恐れているのです、だから、私のところに医者がよこされたのです」、と夫妻を非難している。しかし次の日の同じくコットン宛ての手紙で、メアリー＝ポインズに「極めてやさしく」公妃エリザベートに手紙を書くよう書いている[39]。彼女のマクシミリアン夫妻に対する心情は短期間に揺れ動いている。2 月 17 日付けのコットンへの手紙では、マクシミリアンに対する言葉はさらに厳しくなっている[40]。「古い友達は、完全に政治家です。私はもはや彼を友とは呼べません、以前は信頼と好意をもって接していた筈なのに」、と彼女は嘆く。2 月 18 日のコットンとポインズ宛ての手紙では、かなり皮肉に満ちた書き方で公夫妻を揶揄している[41]。「もし神が健康にしてくださるなら、私たちはウルスラ会員になる以外の方法で彼（マクシミリアン）に奉仕する方法を見つけるべきでしょう。あなた方の古い友達を信用してはいけません。彼は以前からすべてを知っていたということは私が保証します。彼はあなた方のベス（エリザベート）と親密なのだから、彼女には絶対私たちの文通について知られてはなりません」と。

Peters は、マクシミリアンの冷淡さについて、彼は英国女子修道会への好意と教皇の法的権限の管轄領域を分けて考えていたと指摘している[42]。彼が教皇庁の決定に異を唱えることは難しいので

---

38 “…the 2 great ones are afraid not that I should dy by this occasion, but that I should dy ere I could be got out of their country, and that was the cause the Doctor was sent for…”Dirmeier, *Gründung*, 3, S. 149f.

39 “… writ very kindly to Madame…” Ebd., S. 158.

40 “…the old friend is an absolute states man, I doe not say noe friend, he must be used confidently, and kindly and made use of etc.…” Ebd., S. 164.

41 “…If God give health we shall find an other way to serve him then by becoming Ursulians;trust not your old friend, he knew all this before I warrant you…” Ebd., S. 165.

42 Peters., *Personlichkeit*, S. 870.

あるが、それをメアリーには理解することができなかったし、彼がいかに教皇庁から圧力を受けていたかも知らなかった。

メアリーがローマに行った後、彼女がミュンヘンに戻って来ることはなかった。リエージュ、トリアー、ケルンなどにあった英国女子修道会学校は閉鎖される。ミュンヘンのパラダイザーハウスとその学校も閉鎖されることになると、マクシミリアンの今までの態度からメアリーは思っていたかもしれない。しかし、そうはならなかった。ミュンヘンの学校は、この時存在した英国女子修道会の学校の中で唯一存続することになる。そこにはどのような経緯があったのだろうか。

第 3 章　世俗の女学校として存続へ

第 1 節　災禍のミュンヘンと英国女子修道会

メアリー＝ウォードがローマに行った後、ミュンヘンのパラダイザーハウスにはメアリー＝ポインズを中心に一部の会員たちが残っていた[43]。宗教団体として廃止命令を受けていたため、学校を開けることはできなかったし、修道服を着ながらの集団生活も制約を受けることとなった。パラダイザーハウスの存続には、大きな障害があった。ミュンヘン市が三十年戦争の被害を受けたことと、ペストの流行である。

1631 年 12 月 29 日、メアリー＝ポインズはマクシミリアンに対し現在の窮状を訴え、12 人の会員たちを救ってくれるよう頼んでいる。ちなみに同年 3 月の段階では 33 人、9 月では 26 人の会員がいたので、1 年以内に 21 人がミュンヘンを去ったことになる[44]。マクシミリアンはそれに応え、1200 グルデンの支出をホーフカンマーに行わせている[45]。わずかではあるが定期的な援助が続いたおかげで、何とかパラダイザーハウスに残った会員たちは生活することができた。しかし、1632 年に入るとグスタフ・アドルフ率いるスウェーデン軍がバイエルンへと南下し、ミュンヘンは火をはなたれた後 10 日間占領され、大きな被害を受けることとなる。マクシミリアンと家族も一時的にミュンヘンを離れるが、パラダイザーハウスの会員たちは逃げることも叶わなかった。ミュンヘン市はこの後スウェーデン軍が撤退することで解放されるが、今度は別の災厄がミュンヘンを襲う。ペストである。

この 1634 年に流行したペストの犠牲は甚大で、約 15000 人の住民が亡くなったとされる。ミュンヘンに残った英国女子修道会の会員たちも何人か犠牲になった。ミュンヘンに残った会員数は 1633 年で 7 人いたが、さらに減少する[46]。この時代のミュンヘンについて、メアリー＝ポインズが（メアリー＝ウォードと共にローマにいたエリザベス＝コットン宛て）ペスト流行前の 1632 年 4 月 14 日付けの手紙の中で記している。公妃の病気のためもあり公夫妻がインゴルシュタットへ逃れたこと、自分たちは 20 人程残っているがお金も避難場所もないため避難することができないこと、

---

43 Dirmeier, *Gründung*, 3, S. 21.

44 Dirmeier, *Gründung*, 3, S. 194ff., S. 315ff, S., 364.

45 ただし、最初認められたのは 2000 グルデンであったので減額されている。それも、1000 グルデンがまず支払われて残り 200 グルデンは翌年支払われた。Ebd., S. 365.

46 Ebd., S. 416.

私たちはこの町でたくさんのカトリックに助けられたこと、そして「殉教者の冠で我々の苦しみを完成させるために、我々はミュンヘンの地を我々の血で潤す準備はできている。」と悲壮な覚悟を表明している[47]。

メアリー＝ポインズはローマで学校を設立するメアリー＝ウォードたちの手助けをするため、ミュンヘンを去りローマに旅立つこととなる。彼女はドイツを去る前にブラウナウで公夫妻に別れの挨拶に行き、ミュンヘンに残った仲間たちの支援を頼んだ[48]。残されたパラダイザーハウスには、ウィニフレッド＝ベディングフィールドとわずかな会員たちが残ることとなる。

マクシミリアン夫妻は1633年からドナウ河畔のブラウナウに避難しており、ミュンヘンにはいなかった。しかし、ミュンヘンには不在でも決して英国女子修道会のことを忘れることはなく、ブラウナウから定期的に彼女たちへの支出をホーフカンマーに命じている[49]。ローマの状況が進展しない状況下で、英国女子修道会の存続の道は、ウィニフレッドたちに託されることになった。

第2節　世俗の女学校としての認可

ローマにいるメアリーたちにとっても、パラダイザーハウスの存続はローマの学校設立が難航している以上、彼女たちの団体の死活問題であった。メアリー＝ウォードやメアリー＝ポインズも、何度もミュンヘンの状況がどうなっているか書簡でたずねている[50]。1635年の段階でパラダイザーハウスに残った会員たちは、ウィニフレッドと最初のドイツ出身の会員アンナ＝レーリンの2人だけであった。戦争と、ペスト蔓延の期間、ほとんど蓄えのない中で会員たちは別の修道会に入ったり、故国に戻るなどによりここまで会員は減少した。残った2人はマクシミリアンからのわずかな支援によって何とか生きながらえていた。そのわずかな支出さえも、ホーフカンマーからは削減を求められる状況にあった[51]。会員たちが生きていくためにはパラダイザーハウスを存続させ、閉鎖している女学校を再開しなければならなかった。しかし、教皇令によって修道女としての共同生活も、修道女として何かを教えることは禁止されている。では、どうすればよいか。ここで彼女たちは賭けに出る。

1635年11月3日以降のある日、ウィニフレッド＝ベディングフィールドはバイエルン公マクシミリアンに謁見し、一つの提案を申し出る。まず、100グルデンの支援に礼を述べた後、ミュンヘンの英国女子修道会の会員たちがミュンヘンを離れてどこか別の所で働いた方がいいのではないかという提案について、ウィニフレッドは、それは不可能だと返答した。このことから、マクシミリアンが彼女たちにミュンヘンを去るように言っていたことが分かる。ウィニフレッドは離れることが不可能な理由として、すでに23人の会員たちがローマで教皇の援助を受けていてこれ以上は難しいことを挙げている。それを踏まえて、ウィニフレッドは続ける。できれば閣下のご厚情で、世

---

47 “…e se a Sua Divina Maestá piaeceva di fare il nostro[patire compito con la corona del martirio, bagna[mo] volentieri la terra di Monaco [co]n il nostro sangue,…” Ebd., S. 378ff.

48 Winkler, *Englischen Fräulein in Bayern*, S. 22.

49 Dirmeier, *Gründung*, 3, S. 415（1633年5月5日、150グルデン）. S. 428f（1633年9月10日、200グルデン）.

50 Ebd., S. 473ff., S. 477ff., S. 479f.

51 Ebd., S.487.,S. 468.

俗の人間としてこの地の少女たちを教えることを認めてくれないでしょうか、と。そしてそのことでメアリー＝ウォードの真の娘としてバイエルンのために大きな貢献をすることができるのだ、とマクシミリアンに世俗の学校としての存続を訴えた[52]。

結果が出るまでは、メアリー＝ウォードも半信半疑だった。しかし、12 月 1 日、マクシミリアンは口頭で英国女子修道会について学校を再開する許可を出した。その内容は、2 人の英国女子修道会員に対し、世俗の人間として年若い少女たちに教えることで生活費を得ることを許可することを口頭で認めるものとするものである。ただし、ローマ教皇庁の諸命令には従うことが条件で、決して反対してはいけない、とした[53]。ウィニフレッドの提案は受け入れられたのである。これで英国女子修道会の存続は決まった。

ローマにいた会員たちも、この成功には喜んだ。メアリー＝ポインズは、「私たちの母も、この成功を喜んでいます。」とウィニフレッドに返信し、メアリー＝ウォード自身も、「親愛なるウィン、あなたが教える子供たちから、窓や薪のための 1 ペニーを支払わせることに対して、神のご加護がありますように」とすぐ返信した[54]。これはどういうことかというと、基本的に女子修道会が開く修道院学校には、一般の娘たち用の無料通学制の学校と、修道女養成のための高額な学寮制学校の二本立てだったのだが、世俗の学校になると教会から支援が入らないので、通学制学校の生徒からも授業料を取らねばばらなくなったからである。メアリー＝ウォードはこのことに対して、隣人愛のためにすることだから構わない、私の助言に従うように、とウィニフレッドに書いている。彼女たちも自分たちが暮らすためとは言え、貧しい家の娘たちから授業料を取ることになったことに対して思うところがあったのであろう。

ウィニフレッドは、引き続きパラダイザーハウスの校長として残った。この後 1636 年の末には通学制の女学校が開かれ、ほぼ時を同じくして捨て子養育院が設立される[55]。パラダイザーハウスの土地建物はバイエルン公マクシミリアンからの貸与であったが、1691 年、この当時のバイエルン公マックス・エマニュエルによって正式に英国女子修道会に譲渡された。18 世紀には寄宿制の学校も開学し、収入は安定する。しかしミュンヘンは大都市にも関わらず、入学者の数はそれ程伸びなかった。この点について教皇勅令による廃止命令が響いて警戒されたのではないか、と Wright は述べている[56]。

いずれにせよ、英国女子修道会は世俗の学校団体として生き残った。メアリー＝ウォード亡き後も彼女の仲間たちは、ミュンヘンだけでなく、ローマとイングランドにも世俗の団体として女学校を開学する。この後 1653 年からメアリー＝ウォードの死に付き添っていたメアリー＝ポインズが会長に就任した[57]。1662 年、彼女はミュンヘンの学校から分派する形でアウクスブルクに新しく女

---

52 Ebd., S. 481ff.

53 Ebd., S. 484.

54 “…is very fine; our Mother is glad it hath soe good success.” “My dear Winn, Jesus forbid you should make such Children as you teach paye one pennie for windows, wood or aniethinge als,…” Ebd., S. 485f.

55 Winkler, *Englischen Fräulein in Bayern*, S.23.

56 M. Wright, *Mary Ward's Institute. The Struggle for Identity,* Sydney, 1997, p. 46.

57 1645 年にメアリー＝ウォードが亡くなってからはバーバラ＝バーソロープが 2 代目の会長になっていた。メアリー＝ポインズは 3 代目である。Ibid., p. 45.

学校を開くことを決断した。この試みが成功した後、英国女子修道会の女学校はバイエルンとその近郊に次々と女学校を開いていくことになる[58]。世俗の団体として共同体を存続させることは、ある意味大きな賭けであったといえるが、彼女たちの努力は後の時代に報われることになろう。

おわりに

以上、IBMV、いわゆる英国女子修道会（本来の意味での修道会ではなくなったが）が世俗の女学校団体としてバイエルンで存続する過程を概観してきた。それでは、最初の問題に立ち返りたい。なぜバイエルン公マクシミリアン1世はこの団体を認可したのだろうか。

まず、バイエルンにおけるカトリック教育の危機への対処が挙げられる。三十年戦争中、福音派の拡大を阻止すべく、確固たるカトリック信仰を持った臣民の育成は、マクシミリアンにとって喫緊の課題であった。イエズス会を軸にした男子の教育制度整備と比較して、もとから女子の教育体制はほとんど整備されてないミュンヘンにおいて、各地の女学校を成功させている英国女子修道会は必要な団体であった[59]。

メアリー＝ウォードと会員たちにとっては、正式な修道院の認可と故国イングランドの再カトリック化が一番の目標で、在地の女子教育はそのための一つの手段であったのだが、福音派の勢力拡大を食い止めたいカトリック諸侯にとっては、彼女たちの女学校での手腕は非常に魅力的であっただろう。カトリック信仰に基づいた教育を行う女学校を運営してくれれば、その団体が正式な修道会として認可されているかどうかはマクシミリアンのようなバイエルンという大規模領邦の君主にとってはそれ程問題にならなかった。リエージュとケルンの大司教であった弟フェルディナントは団体の廃止命令に従うしかなかったが、マクシミリアンはフライジンク司教の裁治権を慮る必要はなかった。世俗の団体になっても共同生活を継続することはできたし、修道服に似た服を着続けることも可能だった。もともとローマを中心に英国女子修道会への風当たりが強くなったためミュンヘンに進出したのだが、会の存続という面ではこれが吉と出たと見て良いだろう。

マクシミリアンは個人的にメアリー＝ウォードをどのように見ていたのか。この点については史料が存在しないので推測するしかない。メアリーは異端の疑いで囚われている時にマクシミリアンの態度の変化に落胆したが、カトリック「連盟」の首領だったバイエルン公としては、教皇庁と敵対するような措置を公に取ることは難しかっただろう。少なくとも戦争中の窮状でもわずかな額であるにしても吝嗇家で知られる彼が英国女子修道会に援助を続けたことは、英国女子修道会を見捨てた訳ではないことを示している。三十年戦争中におけるマクシミリアンの政治姿勢にはかなり批判もある中で、自領のカトリック信仰に基づいた女子教育制度の確立には変わらぬ関心を持ち続け

---

[58] ミンデルハイム（1701）、ザンクト・ペルテン（1706）、バンベルク（1717）、アルトエッティング（1721）、クレムス（1722）、メラン（1724）、フルダ（1733）、ブリクセン（1739）、プラハ（1747）、アシャッフェンブルク（1748）、フランクフルト（1749）。Ibid., pp. 64.

[59] Dirmeier, *Gründung* 2, S. 415f, マクシミリアンはバルベリーニへの書簡において、いかに彼女たちの少女たちへの教育熱意がドイツの地で必要とされているか述べている。

ていたことが推察される。

ミュンヘンに続き、1662 年にはアウクスブルク、1683 年にはブルクハウゼンと英国女子修道会の女学校は次々と開学、成功を収めることとなる[60]。宗教団体としての認可は先のこととなるが、ミュンヘンでの世俗の学校団体としての存続がなかったならば叶わなかったといえる。イエズス会の女性分派に属する正式な修道会ではなく世俗の学校団体としての存続は、自身の信念に固執し他の宗教団体との統合も拒否し続けたメアリー＝ウォード、そして彼女に心酔し服従してきた会員たちにとっては妥協の産物であっただろう。しかし、大局的に見れば、彼女たちは大きな賭けに勝ったといえる。

---

[60] Winkler, *Englischen Fräulein in Bayern*, S. 26–33.